

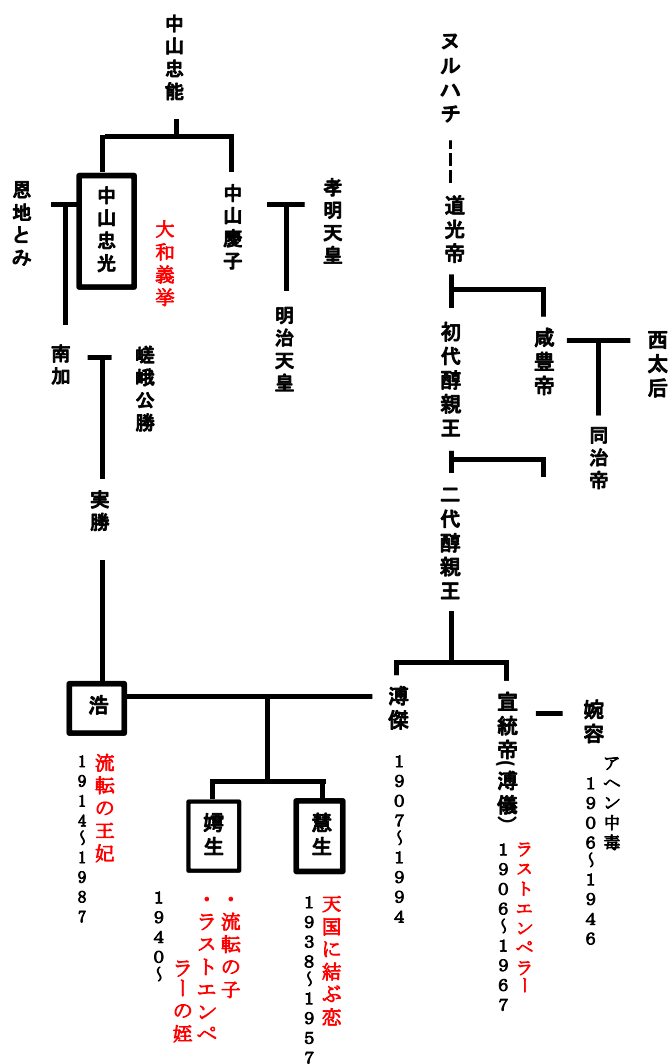
# 天誅組主将 中山忠光とその流転の血脈

(中山忠光と愛新覚羅溥儀、<sup>ひろ</sup> 溥儀の弟愛新覚羅溥傑と結婚した。その娘が<sup>えいせい</sup> 慧生と<sup>こせい</sup> 嫫生の生涯)

令和元年9月2日  
横浜歴史研究会  
山本修司

## はじめに

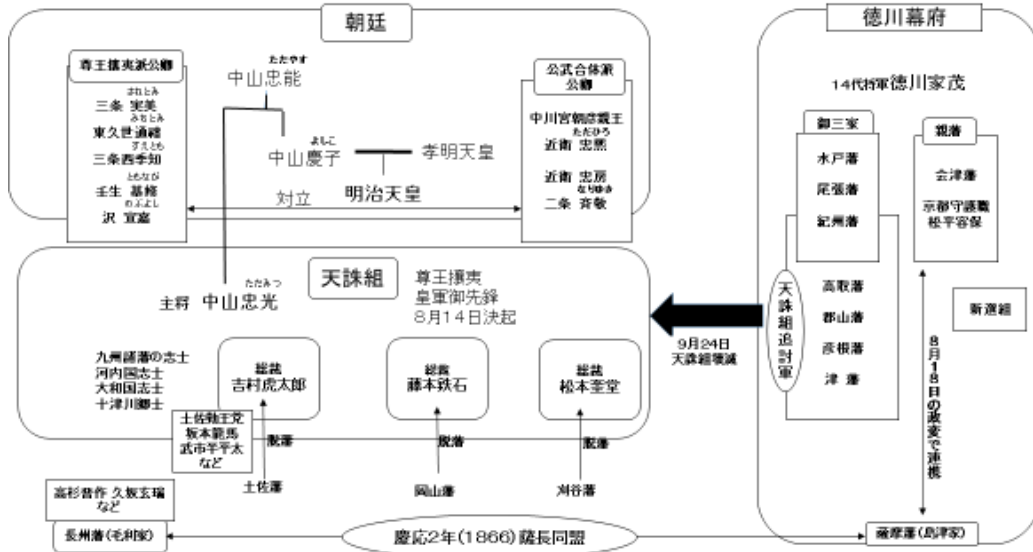
天誅組の主将・中山忠光は明治天皇の叔父（母の弟）である。忠光の曾孫が嵯峨侯爵家令嬢の浩で清朝ラストエンペラー宣統帝・溥儀の弟愛新覚羅溥傑と結婚した。その娘が慧生と嫫生。忠光、浩、慧生、嫫生の四人の流転の生涯を追った。



I-1. 天誅組とは  
明治維新のわずか5年前、幕藩制度の支配体制を打ち破り王政復古をめざし、孝明天皇が攘夷祈願のために大和行幸を決心されたのをきっかけに決起したのが天誅組。皇軍御先鋒となり大和に先行し、天皇の鳳輦（ほうれん、天皇の輿）を迎えようとした。主将は明治天皇の前侍従の中山忠光。総裁は備前岡山脱藩藤本鉄石、狩谷脱藩松本奎堂、土佐脱藩吉村虎太郎の三人で他約八十数名の陣容。天誅組軍令は一心公平無私（究極のボランティア！！）土地を得ては天朝に帰し、功あらば神徳に属し、功を私することあるべからず。淡路国の庄屋で豪農の古屋領左衛門は所有する田畑、山林、事業のすべてを天誅組につき込み、最

後は自らの命を捧げた。また国学者・歌人の伴林<sup>ともばやしみつひら</sup> 光平は天誅組記録方として後世に残る「南山踏山録」を著し最後は処刑された。

## 天誅組の変(1863年)前後の相關図



### 天誅組の行動 (文久3年、1863年)

- ・ 8. 13 攘夷祈願のため孝明天皇の大和行幸決定。
- ・ 8. 14 皇軍御先鋒として中山忠光ら40名が京都・方広寺で決起。
- ・ 8. 17 約80名の天誅組が五條代官所を襲撃、代官鈴木源内ら5人を討ち取り、天領7万石を支配下に。桜井寺に「五条御政府」樹立。
- ・ 8. 18 公武合体派による政変勃発。天皇の大和行幸中止。長州中心の攘夷派は京から一掃(七卿落ち)。天誅組の大義名分消失。
- ・ 8. 21 朝廷から「天誅組追討命令」
- ・ 8. 24~26 約1,100人の十津川郷土が天誅組に合流。高取城の攻撃失敗。十津川郷土離散。幕府軍約14,000の総攻撃開始。
- ・ 9月末 東吉野で天誅組終焉。主将・中山忠光以下7名は京・大坂へ退却。

## I-2. 天誅組主将・中山忠光の流転

### 中山忠光の生涯

- ・ 明治天皇の叔父で天皇の遊び相手(明治天皇の7歳年上)。
- ・ 朝廷に新設された国事寄人になる(19歳)。
- ・ 尊王攘夷派の急先鋒となり、文久3年(1863)2月、長州藩に身を投じ、官位を返上、天誅組主将になる。
- ・ 同年、8月18日の政変により朝廷から見放され、最後は長州に逃れた。
- ・ 身柄は支藩の長府藩に預けられた。
- ・ 禁門の変、下関戦争、第一次長州征伐等が起こり、正義派(尊王攘夷派)に変わり、藩内俗論派(公武合体派)が台頭。
- ・ 1863.11.15 長府藩の刺客により絞殺(享年20歳)。
- ・ 遺骸は下関綾羅木(あやらぎ)の浜の松並木下に埋められた(綾羅木墓所、

のち「中山神社」)。

- ・ 忠光は長府藩潜伏中、下関船宿の恩地興兵衛の娘、恩地登美を側女とする。
- ・ 忠光の死後、誕生した遺児・南加は公家・中山家に引き取られ、嵯峨家に嫁ぐ。
- ・ 中山南加の孫が愛新覚羅浩である。



小説「志士の峠」植松三十里より



天誅組主将・中山忠光

中山忠光という愚人をついでいることによる  
統率のみだれ、十津川兵の離反その後の天誅  
組の命運のことなどを思うと、気が重くなってきた。  
(司馬遼太郎「街道をゆく12」)

### 中山忠光の最後 (「人間臨終図巻」 山田風太郎)

忠光は長州の「招かれざる客」。長州藩内の西の果ての山間を転々と移動、かくまわれていた。長州藩は外に馬関戦争に敗れ、内に禁門の変に敗れ、攘夷派は壊滅期に入った。長州藩はこの厄介者(忠光)を処置せざるを得なくなった。一農家に、妊娠中の侍女恩地登美その他10人ほどの付き添いと暮らしていた忠光は山中で5人の刺客に襲われ、絞殺された(享年20)。

### I-3. 天誅組で散った人(辞世)

- ・ 吉野山風にみだるるもみじ葉は我が打つ太刀の血煙とみよ(総裁・吉村寅太郎、27歳)
- ・ 君がため身まかりにきと世の人に語りつぎてよ峰の松風(総裁・松本奎堂、32歳)
- ・ 雲を踏み岩をさくみしものふのよろひの袖に紅葉かつちる(総裁・藤本鉄石、48歳)
- ・ 吉野山峰の梢やいかならむ紅葉となりぬ谷の家村(天誅組記録方・伴林光平 国学者・歌人。京都六角獄舎で処刑。52歳)
- ・ 君が為思ひし事も水の上の泡と消えゆく淡路島人(究極のボランティア・古東領左衛門。挙兵に際し全財産供出。京都六角獄舎で処刑。46歳)

## II. 流転の王妃

### 嵯峨浩と愛新覚羅溥傑

- ・ 浩は中山忠光の曾孫。
- ・ (浩の夫となる) 溥傑は溥儀 (清朝ラストエンペラー) の1歳年下の弟。
- ・ 1928. 4 溥傑、日本留学。
- ・ 1932. 3 満州国建国。
- ・ 1933. 9 溥傑、陸軍士官学校入学。
- ・ 1934. 3 溥儀、満州国皇帝 (康徳帝) に即位。
- ・ 1937. 4 溥傑 (30歳)、浩 (23歳) 結婚 (日・満友好を目的にした満州国陸軍による政略結婚だったが当初より相思相愛)。
- ・ 1937. 7 日中戦争勃発。 10月 浩、満州へ渡る。
- ・ 1938. 2 長女・慧生、新京 (長春) で誕生。
- ・ 1940. 3 次女・嫫生、東京で誕生。浩、慧生、嫫生、満州へ。
- ・ 1941. 12 太平洋戦争勃発。
- ・ 1943. 12 溥傑、陸軍大学校入学。
- ・ 1945. 2 溥傑夫婦と嫫生、新京へ。慧生は日吉の嵯峨家に残留。
- ・ 1945. 8. 9 ソ連軍、満州に侵攻。兵員174万人 (80個師団) 対する関東軍は8個師団。
- ・ 1945. 8. 13 皇帝一族は新京を脱出。大栗子に仮宮殿。
- ・ 1945. 8. 15 終戦。満州国解体 (13年5ヶ月続いた)、皇帝退位。
- ・ 1945. 9 溥儀と溥傑はハバロフスク収容所拘留。浩と嫫生の流転が始まる。

### 浩と嫫生の流転の旅 (全体経路)



本間典子「流転の子」より

新京→通化→臨江→大栗子（だいらっし）への移動（ソ連軍から逃避目的）  
関東軍首脳は飛行機で通化へ。皇帝一族、宮廷職員ら400名は新京駅まで徒歩後、宮廷特別列車で新京出発（13日午前1時）。溥傑、溥儀も。通化で途中停車後、14日早朝、臨時の首都臨港着。適当な仮宮殿が見つからず大栗子へ。トラックで駅から1.5kの東辺道開発（株）の大栗子鉱業所に入る（14日）。

大栗子で伝えられた溥儀の亡命ルートは「通化」から小型飛行機で「平壤」そして大型機で「東京」。亡命先は京都「都ホテル」。しかし溥儀、溥傑の飛行機は「通化」から「奉天」に変更され、2人はソ連軍に拘束されシベリアのチタを経てハバロフスクに連行、拘留。溥傑一家はその後16年間離れ離れに。

残された愛新覚羅一族は大栗子で孤立。各地で中国人の怒りは日本人への暴行・略奪・殺害となって吹き荒れた。しかし浩・嫫生は中国人と主張、助かる。

大栗子→臨江→通化への移動（ソ連軍から逃避、しかし八路軍に捕縛）

大栗子周辺にソ連兵出沒。愛新覚羅一族は、臨江へ逃避。

八路軍が臨江に進駐。

1946. 1 密告により婉容・浩・嫫生の三人は「皇帝一族の最重要人物」として八路軍に捕らえられ、トラックで通化へ。通化市公安局2階に軟禁。

1946. 2. 3 浩、嫫生、通化大虐殺事件\*（日本人2千～3千人が虐殺）に遭遇。

\*通化大虐殺事件（1946. 2. 3）

通化は地下資源が豊富（鉄鉱石・石炭等）で日本防衛の重要拠点。関東軍が集結し、邦人避難民も殺到していたが1945. 8月末までに通化の日本軍はソ連軍により武装解除されていた。しかし関東軍臨時野戦病院の部隊が残留していて自衛武器も残っていた。当時の残留日本人は3万人以上。

この地でソ連軍、国民党軍、八路軍の葛藤が激化した。

国民党軍と一部の関東軍とで通化に「中日連合政府」構想がもちあがり、「武装蜂起」「皇帝一族奪還」を標榜。

この「連合政府構想」を八路軍が察知。日本人が逮捕され、全市に戒厳令が敷かれた。早朝、蜂起した関東軍は2時間で壊滅（国民党軍の援軍ナシ）。

「報復」で16歳以上の男子日本人が強制連行され虐殺（2000～3000人、多くは一般人）。浩らは極寒の通化市公安局に約1週間軟禁。

通化→新京→吉林→チャムス（主に列車移動・八路軍の捕虜として）

通化からソ連軍と八路軍が撤退。国民党軍が北上。

1946. 6 延吉付近で溥儀の妻、婉容が死去（アヘン中毒、40才）

1946. 7 チャムス着。浩・嫫生は監獄に収監。食事はコーリャン粒のみ。

チャムス→ハルビン（汽車・馬車・渡し舟。八路軍から釈放）

チャムスで浩・媯生は八路軍から突然に釈放。理由は「関東軍への協力や政治活動が無かった」。八路軍の護衛つきでハルビンへ。

1946. 夏 ハルビン着。紅卍字会（道教系慈善団体）に身をよせる。

ハルビン→新京→四平→奉天→錦州（偽名で逃亡）

浩は「濱口幹子」と偽名、引き揚げ日本人に紛れる。

1946. 9 ハルビンからの邦人引き揚げ開始。無蓋貨車で錦州へ。

ハルビンから一緒に行動した約400人の内、子供は媯生のみになる。葫蘆島からの引き揚げ船に乗船時、密告により、浩・媯生は国民党に戦犯として逮捕。

錦州→上海→佐世保（上海までは国民党の捕虜として、その後逃亡）

浩・媯生は汽車で北京へ移送後、飛行機で上海へ移送。

上海旧松井会館2階に軟禁。「岡田」なる日本人医師（女優、岡田嘉子の子？）に遭遇。彼から邦人救出の「上海連絡班」に「邦人婦人と幼女軟禁」が伝わり、連絡班は救出を決心。上海連絡班の中国総撤退最終日は12月28日。

12. 27 深夜、連絡班は国民党の激しい銃撃の中、二人の救出に成功。

12. 28 浩・媯生は変装して最後の引き揚げ船に乗船。

1947. 1. 4 引き揚げ船、佐世保着。1年5ヶ月間、浩と媯生の6000kmの流転が終了。

### 溥儀・溥傑の抑留と釈放

1949. 1 八路軍が北京入場

1950. 2 「中ソ友好同盟相互援助条約（スターリン・毛沢東）」  
ソ連抑留中の満州国要人が中国へ引き渡し決定（溥儀・溥傑ら）

1950. 8 溥儀・溥傑、ハバロフスク⇒瀋陽⇒撫順戦犯管理所

1953. 慧生が周恩来総理へ手紙。父溥傑との文通が認められる

1959. 9. 18 「劉少奇国家主席の特赦令」

12. 4 溥儀特赦（妻・浩が日本人の溥傑は不可。溥傑は離婚を拒否。「もし自分が釈放され、浩と再会したら今度こそ中日友好の仕事に携わりたい」）

1960. 11. 28 溥傑（53歳）、特赦。ソ連抑留から15年以上。  
溥傑、北京・北海公園果樹組に配属。公園内で庭師。慧生の死から3年、媯生は20歳。

### 溥傑家族の再会

- ・ 1961. 2 周恩来が浩の中国帰国を許可。当時中国は大躍進運動（1958～）で環境破壊・農村荒廃・大飢饉。一方、日本は岩戸景気。
- ・ 浩・嫫生は中国へ（香港経由）。3人(及び骨壺)の再会（16年ぶり）。浩は結婚により日本国籍抹消、日本帰国時は無国籍。日本出国時は台湾の在日中国人。香港で中国ビザ申請。嫫生は日本帰化を決意。「清朝最後の皇帝の姪では普通の生活は困難。私は普通の生活が一番欲しい」（流転の子より）。
- ・ 周恩来のはからいで、溥傑は全国政治協商会議文史資料研究委員会の専門委員。浩は中国国籍取得（日本族中国人）。

### その後の家族

- ・ 1968. 5 嫫生、福永健治（浩の妹の甥）と結婚。子供5人。
- ・ 1972. 9 日中国交樹立。
- ・ 1973. 嫫生・健治、北京訪問。9年ぶりの親子再会。
- ・ 1974. 12 溥傑（30年ぶり）・浩（13年ぶり）来日。中山神社・天城山訪問。浩の慢性腎臓病進行。
- ・ 1976. 周恩来逝去（膀胱がん77歳）。毛沢東逝去（82歳）。

その後、溥傑の名誉が回復され、全人代常務委員会委員、並びに同民族委員会副主任。満州族代表）

- ・ 浩は体調不良。東大病院・北京友誼病院で透析治療。
- ・ 1987. 6 浩、北京で逝去（尿毒症、73歳）。嫫生が中山神社境内に愛新覚羅社建立。
- ・ 1987. 12 溥傑5年ぶり来日、愛新覚羅社に浩・慧生を分骨。
- ・ 1994. 2. 溥傑、逝去（86歳）。遺言で分骨、愛新覚羅社に。溥傑・浩・慧生の北京の遺骨は嫫生の手で北京上空に散骨。
- ・ 1995. 1. 17 阪神・淡路大地震で嫫生の自宅は、ほぼ全壊。
- ・ 2007. 1 福永健治逝去（胃がん、67歳）

### 溥傑と慧生

- ・ 1950. 8 溥傑、中国に引き渡され撫順の戦犯管理所に入所。
- ・ 1953. 慧生が周恩来総理に手紙。父溥傑との文通が許可。
- ・ 1957. 12 慧生、学習院大同級生の大久保武道と天城山に死す（19歳）。嗟嘆家では無理心中（ストーカー殺人）主張。

### 慧生の最後（「人間臨終図巻」 山田風太郎）

慧生は学習院大・同級の青森県八戸出身の大久保武道と恋愛した。優雅・快活な慧生は、武骨・求道的な大久保に徐々に惹かれていった。ついに大久保の、「人生をごまかして生きるより、清らかに死ぬほうが立派だ」に同意し、家出（昭和32年12月4日）。大久保はエンゲージリングを購入し、二人は伊豆へ。4

日、伊東温泉の福住旅館に宿泊（二人の寝所は別々）。5日、天城に向かう。同日、慧生の手紙が浩に届き、心中目的が判明。10日、天城山八丁池近くの百日紅の下で二人のピストル射殺体発見。後に、二人の交わした手紙が発見され世にも純粋な美しい恋愛と心中であることが知らされた。「天国に結ぶ恋」であった。

・慧生から周恩来総理へ手紙（1953）。（日本語訳）。中山神社宝物館蔵  
「拙い乍ら日本で習った中国語で手紙を書いています。私の父の消息は長らく途絶えたままで母も私たち娘も大変心配しております（略）周恩来総理にもしお子様がおありになるなら私どもが父を慕う気持ちもお判りいただけるのではないのでしょうか（略）中国人の父と日本人の母によって築かれた私たち一家が真の中日友好を願う気持ちは誰も押しとどめることは出来ません。母は一刻も早く父の元に戻りたいことでしょう。私もいずれは中日友好の懸け橋になりたいと思いこうして一生懸命中国語を学んでおります。どうかお願いいたします。この手紙を父にお届けくださいませ。

・嫫生の通化事件の思い出（本間典子「流転の子」より）  
「このときの地獄絵は生涯脳裏から離れないのでございます。私どもが多くの方々の犠牲の上に今日生き永らえていることを思ったときに、非常に申し訳なく、心の底から手を合わせて、ご冥福をお祈りいたしたい気持ちでいっぱいでございます」。

・嫫生の言葉（本岡典子「流転の子」より）  
「私は乗船のとき、国民党側に見つからないように飛行服のようなつなぎの服を着せられて、飛行帽をかぶり男の子に変装しておりました。船が港から離れる時母は『日吉にあずけてあるエコちゃんに会えるのよ』と言って泣いておりました。  
「幼いころから日本と中国の間で翻弄されて参りましたので、静かな普通の生活が欲しかったのでございます。大陸で母と共に生きて地獄を見たわたくしは、家柄や権勢のようなものには心をうごかされなかったのでございます。それよりも、そのような人間の生々しい欲からむしろ遠いところで、幸せを見つけようございました」

・溥傑の言葉（愛新覚羅浩「流転の王妃の昭和史」より）  
「私が妻と分かち合った信念…中日両国人民永世親隣の信念…を遺憾なく貫徹するには、私の遺骨の一部を中国に最も近い海岸にある愛新覚羅社の妻の遺骨の所に送り、終天永世に中日友好のしるしとする決心である。

・浩⇒嫫生⇒5人の子に求めたもの（本岡典子「流転の子」より）  
謙虚に、命あることに感謝して生きること。  
祖父・溥傑に恥じぬ徳のある生き方をせよ。  
スリに遭っても、追いかけてはいけません。取られたものはまた働いて買



えばいい。命は一つしかない。モノに執着してはいけない。命があればそれでいいのです。

#### 主なる参考文献

- ・舟久保藍 天誅組—その道を巡る— 2017 京阪奈新書
- ・阪本基義 草莽ノ記～天誅組始末～ 2003 奈良県東吉野村
- ・鈴木荘一 明治維新の正体 2019 毎日ワーズ
- ・司馬遼太郎 街道をゆく12 十津川街道 2008 朝日文庫
- ・前園実知雄・松田真一 編 吉野 仙境の歴史 2004 文英堂
- ・植松三十里 志士の峠 2017 中公文庫
- ・東吉野ガイド 2010 東吉野村役場
- ・山田風太郎 人間臨終図巻（上巻） 徳間書店 1986
- ・渡辺みどり 愛新覚羅浩の生涯—昭和の貴婦人— 文春文庫 1996
- ・本岡典子 流転の子—最後の皇女・愛新覚羅嫺生—中央公論新社2011
- ・愛新覚羅浩 流転の王妃の昭和史 中公文庫 2012